

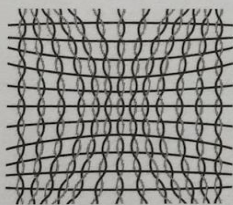
Y式織機を使って世界初の 「たてよこよろけもじり織り」を実現

ふたたびリアル・ジャパン・プロジェクトのインタビュー記事より援用。

「奈良でお目にかかった職人さんが、今はほとんど見ることのない“よろけ織り”を実践されていました。本来は縦の一方向で織るのが主流ですが、これを縦横ともに織ったら、おもしろいなど。そこで開発したのが、うちの代名詞にもなっている“たてよこよろけもじり織り”のストールだったんです。これを実現するために、何度も試行錯誤を重ねて、ようやく特殊な筈と制御装置を開発することに成功。世界で初めてたてよこよろけ織りともじり織りの複合織物が完成しました。私は、ものづくりにおいて、常に新しいことに挑戦したいと思っています。旧式の織機を使った昔のものを復元するのではなく、誰も見たことがないものを作っていきたい。それが私のモチベーションなんです。」（「いいものはいいい職人が作る 職人インタビュー 愛媛県 工房織座 武田正利氏」リアル・ジャパン・プロジェクトより引用）

世界初の「たてよこよろけ織り」とは、工房織座の会社パンフレットから引用すると、以下のような意味である。

たてよこよろけもじり織り



たて糸とよこ糸がともにゆらぎ、まるで孔雀模様のように見える独創的な織り方です。よこ糸をたて糸が縛るような形になるので、目よれせず、美しい柄をくずすことはありません。工房織座でしかできない、世界でただひとつのオリジナルの織り方です。

2006年に「たてよこよろけもじり織り」が商品化され、2009年にはその技術の高さからものづくり日本大賞「経済産業大臣賞」を受賞した。特殊な技術を要する「たてよこよろけもじり織り」だが、特許の出願登録はしていない。武田氏はその理由を、「たてよこよろけもじり織りの場合、テレビや雑誌などマスメディアが先行して情報を流したんよね。それでタイミングを逸したんよ。ほやけど、他の人が真似できんのやったら必要ないんよ。特許登録しても維持費にものすごい銭かかるんやからね」と説明してくれた。「たてよこよろけもじり織り」を含め、技術面のみならずデザイン性にも優れた工房織座の自社ブランド商品は、現在では国内のみならず海外にも顧客を持つ。

事実、工房織座には、マフラーの他にもヒット商品がいくつもある。たとえばコットンキャップである。コットンキャップについては意匠登録されているが、やはり特許および実用新案の申請はされていない。現時点では、工房織座の商品を真似した模造品は売られていない。そう簡単に模倣できないからである。旧式のシャトル織機で1枚1枚丁寧につくられており、かなりの手間がかかるだけでなく、「たてよこよろけもじり織り」の技術は熟練職人でも簡単には織れない。商品の模倣には高い壁がある。マフラーやコットンキャップなど高い付加価値を持つ工房織座の商品は人気が高く、販売開始と同時にすぐに注文が入る。時期によっては、ショップから姿を消すこともある。

売れる背景には必ず理由がある。技術の高さはもちろんであるが、武田氏は、誰も見たことのない商品を生み出すために、原料となる糸選びに神経を使う。毎年2月に名古屋で開かれる（公財）一宮地場産業ファッションデザインセンター主催の「ジャパン・ヤーン・フェア&総合展」に参加し、糸や染色に係わる技術や商品について情報を収集している。つねに新しい何かを求めて商品を企画し、年に2回（春夏と秋冬）、季節に合わせて新商品のカタログをつくっている。工房織座では、顧客を飽きさせず顧客に感動を与える、そ

んなゴールなきモノづくりを目指している。



綿 100%の「刺子ゆらぎ縞コットンマフラー」(左)、麻 100%の「麻のストールーフ」(中)、
100年以上前の力織機で織られたシルクのマフラー「百年孔雀」(右)
(2018年春夏カタログより)



毛 100%の「もじりツートンウールマフラー」(左)と斜子織りの「ウールツインチェックマフラー」(右)
(2018年秋冬カタログより)



コットンキャップ



工房織座の2018年春夏カタログ(左)と秋冬カタログ(右)

(2018年秋冬カタログより)

武田氏をサポートする、頼もしい戦力たち

現在も工房織座では、創業当初の2台を含め9台のドビーの力織機によってマフラーやストール、コットンキャップなどさまざまな商品が生まれているが、特許や実用新案の出願はしていない。意匠登録はやるが、「技」という点では模倣が難しいため、特許をとる必要性がないのでやらない。

2010年に10名いた従業員は、2018年現在では14名に増えた。14名のうち5名がモノづくりに従事している。力織機を使って商品をつくるため、準備工程（緯糸の管巻きや糸の計算）、製織工程（整経を含む）、仕上工程（生産管理を含む）の3つに大きく部門が分かれている。モノづくりに直接携わらない従業員のなかには、宮崎タオル時代に一緒に職場にいた2名の女性が事務的な業務を手伝ってくれている。その他にも強力な戦力が武田氏をサポートしている。

まず、長女の英里子氏は、現在、工房織座の企画営業部ブランドマネージャーとして商品企画やPRに従事し、武田氏のモノづくりを支えている。武田氏が工房織座を立ち上げてから、商品カタログやホームページの作成を手伝ってきたが、いまでは工房織座の強力な戦力となっている。「50年後、100年後『今治武田織り』が伝統工芸になること」を願い、子育てや家事をこなしながらも工房織座の顔となっている（「今治スタイル」[2016] 10頁）。そして、長女の夫・梶弘幸氏、次女の佳苗氏の夫・青野^{しゅうぞう}宗三氏も工房織座の主軸を担っている。梶氏は、前職のキャリアを生かして英里子氏とおなじ商品企画やマーケティングの分野で活躍している。青野氏は、武田氏の指導を受けながら、生産管理を含む準備工程に係わるモノづくりに携わっている。

工房織座が生み出す商品の数々は、今のところ武田氏の技術に依

るところが大きいですが、長女の英里子氏をはじめ従業員が一丸となって「今治武田織り」を伝承していくために、10年後、20年後の未来を見据えて経営やブランディングをおこなっている。武田氏に匹敵する技術者の育成は難しいが、「いかに今ある技術まで近づけて今後に繋げるか」という課題を前に、工房織座では日々皆の努力が積み重ねられている。

「ここに座して織る」という意味から「工房織座」を社名に付けた武田氏は、家族を含めて従業員たちに生まれ故郷の玉川町鬼原で工房織座のバトンを引き継いでくれることを願っている。2005年11月の創業から数えて2020年で、丸15年となる。節目の年でもある。（次号につづく）

